

松元崇著「武器としての日本語思考」新潮新書、新潮社 2026 年 2 月 20 日刊を読む

「英語の議論にどう対抗するか」

ー英語は小さい声でしゃべっても通じないー

1. 正面から反論せよ

- (1) 英語の議論には、どう対抗すればいいのでしょうか。「相手が英語の議論で来るときには、まずは日本語での議論の仕方を忘れてしまうこと」です。相手の「ズームアウト」の議論には、こちらも同様の手法で対応し、無理難題の主張に対しては日本語なら当たり前の思いやりなどは控えて、正面から反論することを繰り返して負けないようにするのです。
- (2) 他方で、そうでない議論においては日本流での対応を行う。そうしながら、全体の議論を大まかな状況から入って具体的な問題点を詰めていく「ズームイン」の手法でまとめていくようにするのです。そんなことを言われてもできそうにないと言われそうですが、訓練の問題です。必要なのは、「欧米人を相手とする際には日本流に言葉を断片的に投げ出すのではなく、言葉をきちんとつなぎ合わせて欧米流で論理的に対応する訓練です。文部科学省も近年、論理的な表現を重視する「論理国語」を高校の科目に導入しました。実は、米国人にとっても欧米流の議論は訓練のたまもので、彼らは彼らで小学生の時からスピーチの授業などで訓練されているのです。
- (3) 全体の議論を「ズームイン」お手法でまとめるというのは、グローバル・サウスの国々には受け入れられても欧米諸国は受け入れないのではないかなと言われそうです。筆者も、かつてはそう思っていました。しかし、鈴木孝夫氏の「日本の感性が世界を変える」という本を読んで、考えを変えました。この本の中で鈴木氏は、日本語を学んだフランス人が「私が私がを主張しないことは最初は気持ちが悪かったが、全体の中に何となくいることが、ふあ～として心地よい」と感じるようになったという例を紹介しています。
- (4) 「日本語の話者は相手との感情を共有しようとしませんが、感情の共有は先に紹介したようにアダム・スミスが唱えていた「道徳感情論」の基本的な考え方です。そして、「日本語は人間が言語を話すようになった原点をよく保存していると考えられる言語なのです。とすれば、日本語の議論で、グローバル・サウスの国だけでなく欧米の国々の人も入った会議をまとめていくことが出来るはずです。

2. 日本語の力が発揮された T P P 交渉

- (1) 1980 年代の日米金融協議での米国の議論の押し切られた経験を持つ筆者は、かねてから日本人が国際会議などの場で英語の議論に対抗していくことは難しいと考えていました。その考えを変えてくれたのが、筆者が内閣府の官房長をしていた 2010 年から行われた T P P (環太平洋パートナーシップ) 交渉です。
- (2) この交渉では、内閣府の甘利昭大臣以下の交渉部隊が、米国や豪州などを相手に英語の議論を展開し、一步も引かない交渉で取りまとめを行いました。しかも、主要な参加国だった米国が、トランプ政権への交代があって途中で抜けてしまうというハプニングまであったにもかか

わらず、日本がリーダーシップを発揮して、「ズームアウト」の議論で、残された国々との間での交渉もまとめ上げたのです。

- (3) その際、難しい問題を抱えていた国内調整については、筆者と大蔵省で同期の佐々木豊成内閣官房副長官補の部隊が、農業分野をはじめとする様々な分野で「ズームイン」の議論によって、取りまとめを行いました。筆者は大蔵省時代、主計局の主査、主計官として 7 年間にわたって農業分野を担当していましたので、農業関係者との調整の難しさをよく知っています。それは、利害が錯綜する今日のグローバル・サウスの国々との間での利害調整のようなものです。それをまとめ上げたのです。
- (4) 利害が錯綜する国際社会で日本人が調整力を発揮できることは、筆者が長年研究してきた高橋是清の活躍でも実証されているといえます。高橋は、日露戦争の戦費調達のための外債発行で、米国・欧州の一流の銀行家を相手に丁々発止の交渉を行いました。その際、高橋はユダヤ人銀行家のジェイコブ・シフに助けられたのですが、それはユダヤ人が当時のロシアから迫害されていたという国際情勢を背景にしたものでした。複雑な国際情勢をしっかりと踏まえて難しい交渉を乗り切ったのが高橋だったのです。

3. 筆者の英語も “difficult”

- (1) とは言っても、自分は英語が苦手だから国際社会で活躍など出来ないと考える方もいらっしゃるでしょう。しかしながら、英語が上手でなければ国際社会で活躍できないというのは思い込みです。ソニーの盛田さんのエピソードでご紹介したように、英語で仕事をするのに上手である必要はありません。大きな声で話して、通じればいいのです。
- (2) 筆者は内閣府を退官した翌年の 2015 年、サンフランシスコで行われたビジネス・スクールの卒業 35 周年の同窓会に行きました。そのときのパーティの後、妻がホテルに帰ってきて、こんなことを言いました。
- (3) 「今日は面白い話を聞いたわ。あなたのお友だちが、タカシの英語は、“difficult” だった (難しかった) と言っていた。あなたは卒業式で学年に最も貢献した学生として、日本人で初めて全卒業生の前で表彰されたと自慢しているから、英語の達人かと思っていたけれども、そうでもなかったのね」
- (4) まあ、筆者も自分が英語の達人とは思っていませんでしたが、私の英語が “difficult” だったと言われたことには考え込んでしまいました。
- (5) 悩んだ末の結論は、下手な英語でも 相手が一生懸命、筆者の言うことを理解しようとしていたから、“difficult” だった、ということです。それは立場を変えてみれば分かります。日本にいる米国人の日本語が下手でも、こちらにとって大事な問題を議論するとなれば、一生懸命理解しようとしします。筆者の留学当時はジャパン・アズ・ナンバー・ワンと言われていた時代で、ビジネス・スクールの米国人学生の多くが日本の会社経営の成功の「秘訣」を学ぼうとしていました。そんな「秘訣」など、日本語でも簡単に説明できることはありません。それを筆者が上手でもない英語で説明し、相手はそれを一生懸命に理解しようとしてのですから、“difficult” だったとしても無理はないでしょう。大事なものは英語よりも中身だということです。

4. 英語は小さい声でしゃべっても通じない

- (1) 実は、日本語は遠くに届かない小さい声で話されるのに対して、英語は大きな声で話されます。「大きな声ではなさいないと英米人にはなかなか通じない」ということがあります。

(2)英語は「話す、聞く」に特化した「音声言語」です。日本語の音節数がイロハ 47 文字を基本に 110 程度しかないのに英語の音節数は数千もあります。数千もある複雑な音節をアルファベット 26 文字で写すことに割り切り、たくさんの音節をフルに使って「話す、聞く」に特化しているのが英語です。そのような英語には音声自体に特定の意味がありますので、それを大きな声で話すことによって相手により強く印象付けることが出来ます。そこで、人々は大きな声で話すのです。

(3)それに対して日本語は、音声ではなく文字で意味を特定する「文字言語」です。しかも同音異義語が多く、文字の裏付けがなければ音声だけではおよそ意味を特定しえないという特殊な言語です。そのように音声が無力な日本語を大きな声で話しても、何ら意味の特定につながりません。そこで日本人は小さい声で話すのですが、そんな調子で英語を話しても、およそ注目されず、通じません。そのため、日本人が英語を話すにあたっては、そのような英語と日本語の基本的な違いをしっかりと踏まえて大きな声で話すことが必要なのです。それは、訓練というよりも心がけの問題です。

5. 「国際人」信仰は日本だけ

(1)ここで、日本でよく言われる「国際人」についても付け加えておきます。実は、「国際人」といって通じるのは日本だけなのです。

(2)筆者が日本アスペン研究所というところでご一緒しているフランス文学者の塩川徹也氏は、フランス人に「国際人」にあたるフランス語があるかを聞いてみたところ、答えが得られなかったばかりか質問の趣旨をなかなか理解してもらえなかったといえます。日本人、米国人、中国人、場合によっては無国籍の人、さらには難民はいても、「国際人」などいないというのです。

(3)多くの日本人が、「国際人」について抱いている素朴なイメージは「英語やフランス語ができて国際舞台で活躍できる人」あたりでしょう。2012 年に文部科学省が定めた「グローバル人材の育成について」の定義にもまず出てくるのは語学力です。しかしながら、語学力だけでは国際的に通用しません。エジンバラで活躍していたハーディ智砂子氏は、国際的に通用する人になるためには、英語よりも日本の古典などの人文知こそ大切だと言っていました。要は、中身なのです。それは、日本語がどんな上手でも、中身のない外国人を「国際人」とは認めないということと同じことです。

(4)ここまで、英語の議論に対抗していくかということを述べてきましたが、実は、今日の英語の議論にしっかりと対応しているのが中国と韓国です。ということで、ここからは中国語を韓国語について見ていくこととします。まずは、中国語についてですが、その際、どうしても知らなくてはならないのが中国語の歴史です。ちなみに、今日の中国がすぐに言うのが、「歴史に学ぶ」ということです。

<コメント>

「英語は小さな声で話しても通じない」なぜか。ではどうしたらよいか。学んだテキスト(英文)を大きな声で何回も何十回もスラスラよく読めるようになるまで発音の練習。英語も、「学んだことを自分のことばでいえる(表現・説明できる)」ようにいたしましょう。

2026 年 7 月 9 日(木)